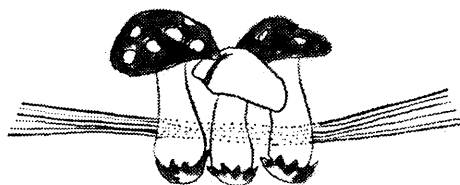


エリクソンと幼児教育 (11)



生 弥 科 仁

同一性形成と幼児期

エリクソンによれば、同一性の核の形成は人生最初期における母親との出会いに始まる。それは、母親と乳児がごく初期に微笑を交換するときに、乳児が最初に母親を認め、そして母親によって認められたと感じるときに始まるのである。また母親の声が彼を呼んだときに、彼が自分は名前をもった存在であると感ずるときに始まる。このように、子どもは、その時、すでに自分が何ものであること、つまり一個人であることを感じはじめるのである。

こうして始まる同一性の形成は、心理社会的発達の各段階の課題として指摘された自我の諸特質の発達や、その発達を左右するあらゆるものと関連しながら進むと想定されている。たとえば、乳児にとって母親が予測できる外的存在となり、さらに内的に確実なものとなったとき、基本的信頼が獲得されると考えられているが、その過程において乳児が重ねる経験の一貫性や連続性や斉一

性が、実は、自分は「内面的同一と連続性」をもった存在であるという自我同一性の基本的感覚をも準備するといふのである。また、同一性の形成に大きな役割を果たす同一化の基礎となる「取り入れと投影のメカニズム」は、母親と養育される子どもとの間の相互性が両者にとって満足すべきものであるかどうかによって左右されることが強調されている。そのような相互性の経験が、他者、つまり愛の「対象」に向かって、手を伸ばすときのよりどころとなる子どもの側の安定した自己感情を育むという意味で重要だからである。このように、エリクソンは人間の環境への先天的な協調という仮説に立って、この協調の基本が発達途上の個人、つまり子どもと社会的環境を代表する母親との間の相互的關係にあると考え、子どもがきわめて初期の段階で、社会環境との出会いの中で社会的性格を展開させていく過程を問題にしたのである。しかも、子どもにとって情報環境は誕生以後に始まるのではないことが、最近の急速に進歩した医学やその他の分野の診断技術や分析技術などによって明ら

かにされている。子どもは胎内にいるときから母親の心音を聞き、母親の声や外界の音を聞いているのである。最近、報告された新生児が母親と医師の声をすでに聞きわけるといふ事実や、子宮内の血流音を聞かせると泣きやむという事実は、胎児期にすでに母と子の相互作用が始まっていることを裏付ける興味深いデータであり、エリクソンの相互性重視の考え方は、その適用範囲をさらに広げることになったといえると思う。

また、エリクソンは幼児童期に子どもが抱く自己像が同一性の下地になるという。この仮説は、子どもの養育にあたる者にとってとくに注目に価すると思われる。たとえば自己像についていうならば、それは、子どもが自分はいい子であるとか、悪い子であると考えたり、或は価値のないものと考えたり、その反対に価値があると考ええるというようなことが中心の事柄である。つまり、それは自分であるという状態、およびそれにつけられる価値の問題である。しかもその場合、自分が何かに値しているという感じをもつこと、つまり自己価値感をもつこ

とができるということが重要である。そしてそれを最初に確かなものとして子どもに与えることができるのは親の愛をおいて他にはないのではあるまいか。なぜなら、世間では「何をすることができるか」という観点から人間の価値が決められる場合が多いが、家庭では、子どもは利口だからとか、よい性格だからといって親から愛されているのではない。その子どもが親の子どもであるから愛されているのであって、そこには何の条件もついていないのである。つまり、子どもであるということだけで愛される価値があるならば、その子は自分が何かに価値の存在であると感じることができるにちがいないからである。このように親の無条件の愛が肯定的な自己像を形づくる基礎となるわけで、したがって、エリクソンの説く人生最初期の信頼にみちた暖かな母子関係のもつ意味は一層その重みを増すことになるのである。

次に、子どもが言葉を理解できるような段階になると、大人との言語的なかかわりあいと、言葉として表現された真実の社会的価値との関係が、健全な自我発達を

支持するような諸経験の中で同一性の形成に重要な役割を果たすことについても、エリクソンは触れている。たとえば、親のほめことばが子どもの自己像の形成に一役かうことをその具体例としてあげることができよう。それに関連して、ギノットの主張はきわめて示唆に富むと思われるので、紹介してみよう。彼によれば、適切なほめことばには二つの部分があるべきであるという。一つは親の言葉であり、もう一つは、そこから引き出される子どもの結論である。この部分は言葉にならないこともあるが、子ども自身が描く自己像に結びつくという。たとえば重い荷物を運んだ息子に、「重くて、大変だったなあ。」と父親がねぎらえば、「ただ僕やったよ。僕強いもの。」と息子が答えるように、親の言葉は、はっきりと具体的に子どもの行為や努力や、或は思いやりなどを指摘する。その言葉使いは、子ども自身が自分について現実的で肯定的な結論を必然的に引出さずにはおかないようなものであることが望ましいという。そうすれば、子どもはこのような言葉に反応して自分について結論した

ことを、後で黙って自分自身に繰返す。これが自分自身についての肯定的なとらえ方、肯定的な自己像を形成していくのに役立つのである。ギノットは、「親のほめことは、子どもが肯定的な自己像を描かざるをえない魔法のキャンパスのようなものでなくてはならない。」と述べているが、まことに当を得た、味わい深い表現であるといえよう。

さらに歩けるようになったことを発見したばかりの子どもは、歩くという活動自体がただ楽しくて、またこの新しい能力を十分に習得し、完成させたい欲求にかられて、その活動を繰返さずにはいられないかのように見える。しかし、子どもはただそれだけの存在ではないとエリクソンはいう。子どもは、「歩くことができる」自分が獲得する新しい地位と能力とが、自分が属する文化の人生設計の座標の上でどんな意味を与えられているかをやがて意識して行動するようになるのである。たとえば、「自分の足でしっかり立つことができる者」、或は「遠くまで行くので見張っていないなければならない者」な

どのように、「歩くことができる者」に含まれるいくつかの意味の中の特定のものを内面化することが、子どもの発達過程の一つである。同一性形成の過程においては、このような身体の支配とその文化的な意味とが一致することや、身体を働かす喜びと社会的な承認とを同時に経験することなどを通して、子どもがより現実的な自己価値感や自尊心を獲得することが必要であると、エリクソンは強調している。こうして獲得された自尊心が、自分は確実な未来に向かって有効な手段を学びつつあり、社会的現実の中で明確に定義された自己に発達しつつあるという一つの確信となるからである。

しかしながら、同時にエリクソンは、心理社会的発達において連続性の断絶という危機に子どもが直面するとき、このような自己確信が再三揺らぐという事実に注目している。たとえば、幼い少年に課せられる特定の環境からの要求と、「大きくなった少年」に課せられる要求との間に連続性が失われた場合や、環境の大きな変化にもなつて要求間に不連続が生じた場合などに子どもが

示す不適応行動を例にあげることができる。またその実例を、エリクソンの患者、死の観念が心的刺激となつててんかん発作を起こした三歳のサムにみることもできる。

サムの一家は、いろいろな国からの移住者が寄り集まつて生活していた地域から最近、別の町に新居を構え、その町の唯一のユダヤ人一家として暮らすようになった。彼が以前住んでいた環境では、男の子の理想像といえば、家の外では強くたくましく、家の中では小賢しい子であつた。また万一にそなえて、先に相手を殴る習慣を身につけておくことはよいことだと考えられていた。しかし引越してからは、近所の子どもを打つてはいけない、また周囲の異邦人たちから、「ユダヤ人なのに、いいこだね。」といわれるように、おとなしい、行儀のよい子どもになるよう両親から言い聞かされた。そして、生来、利発で活発であつたサムは、自分の攻撃的な欲求を調節して、機知に富んだいたずらっ子へと変身を驚くほど上手にやってのけたのであつた。ところが、この新

居を父方の祖母がはじめて泊りがけで訪れたとき、何か彼の持ち前のユーモアを失わせた。それは、この一家の日常の社会的、経済的問題やユダヤ人であるがゆえの先祖伝来の目に見えない葛藤の上に、さらに祖母の来訪による緊張が加わつたために両親の苛立ちや不安が高じたが、それを反映して、サム自身の外部的な危険に対する耐性の限界がとくに低下していたためかもしれないとエリクソンは分析している。いずれにしても、サムは友だちをひどく打つて怪我をさせてしまい、仲間はずれにされたのである。そして、この活発で、外向的な少年は、よぎなく祖母と家にいなければならなくなった。しかも心臓に持病をもつ祖母をからかったり、いたづらをすることを禁止されたのであつた。日まじにサムの緊張は高じ、ある日母親が一寸留守をした間に、サムは、危ないからと注意する祖母をわざとからかって、椅子によじ登り落下してしまった。祖母はそのショックで心臓発作を起こして倒れ、その後病床にいたまま不帰の人となつたのであつた。この祖母の死は、サムにとっては、

彼の友だちやその親たちが暗に示したこと、つまりサムは手のつけようのない悪童であるということを確実にしたようなものであったのかもしれない。

ところでエリクソンはこの事例の分析にあたつて次のような事情を重要視している。すなわち、この危機が訪れたとき、暴力にさらされるユダヤ人特有の運命から生じたサム一家の攻撃性に対する耐性の低さといひまつて、サム自身の怒りっぽい気質や体質や、そして自発性が旺盛になる発達段階などが、すべて集中して、サムに移動の自由の拘束や攻撃性の表現に対する抑制などに耐えることをむづかしくしたという事情を指摘している。そこに、人間は一つの有機体であり、社会の一員であり、そして歴史的存在であるという三次元の枠で、その心理機制を理論化しようとするエリクソンの視点をうかがうことができる。

さて、話を本筋に戻そう。サムは危険な場面に遭遇すると、「対向恐怖症」的防衛機制と呼ばれる機制を使っていた。つまり彼は怯えるといつても攻撃的態度に出るの

であつた。狼狽させられることを恐れて、他の人ならば避けたがるような情報に対しても、サムは不安にかられながらも執拗に質問を浴びせかける傾向があつた。このような防衛手段は、彼が以前住んでいた環境では是認されてゐた。そこでは、彼がしつこく、小賢しく振舞つたときに、よい子だともてはやされてゐたのである。引越した先で、サムが利口ないたずらっ子になり、質問屋になろうとしたことは明らかである。その役どころは、以前の環境では、彼が危険に直面したときにうまく切り抜ける手段として役に立ったが、新しい環境では、かえつて危険を招くことを彼は知つた。つまり、それは、彼の家庭や近隣の新しい事情のために、その価値を切下げられる羽目になつた。そのような価値の下落は自我の防衛体系の機能を失わせる。すなわち「対向恐怖症」的防衛機制がその攻撃を封じられると、彼は外部からの攻撃に對して無防備であると感じる。そこで彼は攻撃を予期し、それを挑発することさえする。そして、彼の場合、その「攻撃」は彼自身の身体的内部からてんかん発作と

して起こったのであった。

まさにこのような不連続こそ、一つの危機の状況であり、子どもは行動パターンの再構成とそれに伴う妥協が要求されるが、このような妥協は、その努力を進めれば社会的評価が得られるという一貫した感覚によって、はじめて補うことができるというエリクソンは考えている。つまり、その社会で意味のあることを成し遂げたとして認められることによって、子どもの自我の同一性は強さを獲得することができるというのである。そして、けんか早い少年や、活発で小賢しい少年が、おとなしい、紳士的な少年になることを要求されるとき、子どもの自我はこれらの二つの価値観を一つの是認された同一性の中に統合することができなければならないし、また両親も社会もその自我の努力を支援しなければならない。こうして形成された同一性が、仕事の中でも遊びの中でも、そして公的行動の中でも、私的な行動の中でも、子どもに紳士的な少年であってしかも活発な少年であることを保証することができると考えられている。

このように、新しく付加される同一性の要素と既存の同一性の諸要素との関係を統合するのが自我の機能である。子どもの成長の過程において、身体的成長や知的発達、社会からの新しい要求や圧力などが、過去の適応に不全なものだったように思わせてしまったり、過去には価値のあった役割や手段を疑わしいものにしてしまったりするとき、早い時期に結晶化された同一性は、新しい葛藤に圧倒されてしまうこともある。また同一性の変動があまりに急速であったり、あまりにも激しく対立しあっているとき、自我はその統合に失敗することもある。しかし、エリクソンによれば、このようなことは、むしろ発達にともなう正常な危機であって、それは、社会が新しい各発達段階特有な機会を子どもに提供するにつれて、その成長過程から新しいエネルギーを供給されて、前進的に解決されていく、すなわち、新しい特質を付与されて強化された自我によって、さまざまな同一化や価値観は発達途上にある同一性に統合されていくと主張されている。

したがって、発生的な見地からみると、同一性形成の過程は、一種の発達の構造化である。社会は、家族、近隣、学校などにおけるさまざまな下々との接触を通して、子どもにさまざまな役割との実験的な同一化の機会を提供する。子どもは次々と暫定的な同一化の経験を重ねる。同一性は、このような断片的な同一化が子ども時代を通して自我によって選択的に統合され、再統合されて次第に確立されていくのである。

エリクソンは、同一性形成の過程は「生得的、体質的要因、リビドー欲求、恵まれた能力、重要な同一化、効果的な防衛、成功した昇華、さらには一貫した役割などを一步一步統合していく構造化の過程である。」(『自我同一性』)と述べている。

(津田塾大学)

歯医者さんたちが、診療室でかわされる子どもとの会話を小冊子にまとめられました。『歯科医院の子どもたち』より、一部を紹介しましょう。

☆

先生「奈々栄ちゃん 髪切ってもらったの？
かわいいねえ」

奈々栄「せんせいは サア…… エーと…… せんせいはい かみきつてないけど かわいいね」

(四歳女児)

☆

子ども「せんせいはいしやさんで おソーメン
たべさせてくれるの？」

先生「えっ!!」

子ども「わりばしが出ているよ」

(乳歯冠装着時に割り箸をかませる時に)

☆

目のまわりに青いあざをつけて来た子どもに対して

先生「目のまわりの青いの、どうしたの？」

子ども「すべり台からおちたの。でも先生の目の

まわりも青いじゃない」

(アイシャドウをさして)